2023年度白鷗大学入学式　学長式辞

本日、ここに2023年度学部・大学院入学式を挙行するにあたり、大学を代表して、新入生諸君、ならびに、ご家族の皆様に対し、心からお慶び申し上げます。

皆さんは、これから始まる大学生としての日々に対する夢や希望を胸に、さぞかしワクワクしておられることでありましょう。そして、大学院生としてより高度な水準に挑戦しようとする皆さんは、高まる熱い思いを抱いておられることでありましょう。私たちは皆様の新しい出発を祝うと共に、皆様を心から歓迎いたします。加えて、今日の晴れの日を心待ちにされ、長い間近くでそして遠くで見守ってこられたご家族の皆様にはその安堵のお気持ちに対し、心からの敬意を表したいと思います。

本日、私はこのところのずっと関心事である国際交流の話をいたします。これは私が生涯大事にしてきたことです。入学式で国際交流の話をする理由は、私たち白鷗大学の目指すところが、言うまでもなく、異なる文化との交流にあるということです。今やあらゆる生き物の多様性を大事にすることが謳われる時代におきまして、異なる言語で異なる文化と出会ってみることは、皆様の未来にとって大変な学びの機会であり、老いた私にとっても大変楽しい経験であります。

そして、そこで知る相互の違いはけっして間違いではないということです。皆様も多様な個性を内に秘めながら、それが間違っているかのように感じて、その個性を隠しておられるようなことはないでしょうか。日本社会は同調圧力の強い国と言われていますが、皆様も社会規範や他人の顔色を伺って、その期待に合わせ、つまり同調して生きようとするために、自らの個性を活かしきれていないということはございませんか。

日本語に「自分を殺す」という言葉がございますが、これからの大学生活、大学院生活は、その隠された個性や可能性を殺さず、十分に活かして、試していただきたいと思います。日本語の「私」は「わたし」、渡すことを意味するのだと思います。内なる個性と、外にある現実、この両者をうまく渡して生きること「わたし」という言葉は表現しているのだと思います。個性と現実の橋渡し、これが皆様の新しい大学生活への私の提案の一つです。

さらにもう一つ、国際問題で言うならば、今ロシアのウクライナ侵攻という戦争が、人々の期待に反して続いているからであります。長引くコロナ禍に続き、この戦争では、社会が、そして世界が大きな変革を余儀なくされているという状態であります。

さて、私の専門は精神分析学というもので、その観点から、危機は家族的な大喧嘩として考えるのがわかりやすいと思い、その比喩を使います。ウクライナのゼレンスキー大統領自身が今回の問題を同じ母親から生まれた兄弟の戦いだと言っておられました。

では、このような人間同士の大喧嘩はどうすればなくなるのでしょうか？

今、この戦争で、密かなベストセラーになっている本「ひとはなぜ戦争をするのか」でも、心理学的な解決策が語られているのです。この本は、ひとはなぜ戦争をするのか、と物理学者アルバート・アインシュタインが問いかけて、精神分析学者ジークムント・フロイトが答えるという1932年の書簡からなっております。フロイトはこの頃、人間には快感や平和を求める心性に加えて、不快や不幸を引き起こす破壊的衝動や憎しみの心理を追求していたのです。

つまり、平和であっても戦争は起きる。では戦争と平和はただただ繰り返されることになってしまうのでしょうか。ここで私たちが求めるのは、問題の処方箋です。これに対して、主知主義者フロイトは文化による解決を提案するのです。その方法を、「昇華 （しょうか）sublimation」と呼びます。

科学では、固体が液体を経ずに直接に気化して気体になる現象で、ドライアイスという固体が空気の中に溶け込んで無くなってしまうところを指します。同時に、精神分析の説く「昇華」の概念によれば、人間の危険な本能衝動は非常に可変的であって、この欲望およびその手段を人々に広く共有された文化的な方法に置き換えることができるというのです。つまり、表現してはならないような攻撃本能や憎しみを、もっと生産的なことや人を傷つけないものに置き換えることができれば、喧嘩をしないですむということです。

例を挙げますと、例えばスポーツや芸術がそうなのです。人間における生々しい闘争本能や競争心を、試合やコンテスト、発表会、あるいは研究で発揮していただければいいのです。

スポーツによって戦争がやめられるというのは、例えば戦争で勝つよりも、野球で勝った方がいいということです。野球では「一塁で刺され、二塁が盗まれ、三塁で殺される」という乱暴な表現をするスポーツであっても、実は誰も死んでいないのです。私も殺さず。自分も殺さず、誰も殺さない。

そう考えると、相手に勝つとか、一等賞をとるとか、また逆にコンテンストで負けるとか、発表会の失敗で悔しい思いをするとかが、何と戦争や大喧嘩をしないで済む方法になっていると言うわけです。先日、本学の教員であられる栗山英樹監督率いる侍ジャパンが世界一になりましたが、米国に勝ったというのは、戦争で勝ったり負けたりするよりも圧倒的にいいのです。

どうでしょう。新入生の皆さん、スポーツや芸術、そして学問で、戦争の代わりになるような勝負や挑戦をしてみませんか？大学とはそういう方法を学ぶ場です。それには今こそ若い皆さんのエネルギーと知恵が必要です。自らの内にある個性的な思いを外の現実に向け、橋渡しするためにも、大学生活を、今までのやり方を変えて、実験し、新たに表現し、挑戦し、戦ってみる機会としていただきたいのです。少なくとも皆さんには、私なんかと比べて、そのための溢れる時間があるのです。

皆さんは、本学のモットーである「プルス・ウルトラ」、すなわち、「さらに向こうへ、一歩踏み出すこと」を意味するこの言葉をご存じだと思います。今立つ場所を踏まえ、もう一歩前に踏み出しましょう。平和のために、見果てぬ夢の実現のために。国際交流を大事にし、私たちの今立っている場所のさらに向こうへ、若い鷗のように飛んでまいりましょう。

今日から皆さんは見知らぬ人とたくさん出会い始めるでしょう。先生たち、同級生の方々、あるいは違う学部の方々と。これらが異文化交流の第一歩です。

それに向けて、心からご入学おめでとうございますと申し上げ、その個性的な私への旅が充実したものとなることを祈りたいと思います。どうぞ宜しくお願い致します。

2023 年 4 月 3 日

白鷗大学 学長 北山 修